

江戸時代の貨幣改鑄を振り返る

予算委員会 専門員

おの りょうじ
小野 亮治

いわゆる異次元の金融緩和策が講じられ1年半以上が経過し、この間、追加緩和も実施された。消費者物価は、消費税率引上げの影響を除き1%程度で推移している。戦後、かつてないほどの大幅な金融緩和の中、江戸時代の貨幣改鑄等の「金融政策」の事例が注目されている。

貨幣の歴史を遡ると、物々交換の不便さに対応するため、貝や石など物品貨幣が用いられ、更に金や銀など金属が貨幣に使われるようになった。既に、紀元前の中国、古代エジプト、古代ギリシャ、そしてローマ帝国でも、金属の鑄造貨幣が使われた。日本でも7世紀後半、銅銭や銀銭が使われたが、質の悪化等で貨幣の信用は失われ、10世紀半ばを最後に16世紀まで国家の新貨幣発行は行われず、この間、中国からの渡来銭が使用された。16世紀後半になると、戦国大名により鉱山開発と併せ金銀貨がつくられ、徳川家康は1601年慶長金銀を発行、その後、江戸幕府は寛永通宝を発行し、金貨・銀貨・銅貨等の三貨制度が整うこととなった。ここに統一政権による日本独自の貨幣体系が成立したと言われている（日銀資料等より）。

江戸時代には、金や銀の生産に限りがある中、度々、経済規模の拡大に対し貨幣不足に陥り、貨幣流通量の増大（量的金融緩和）や幕府財政の立て直し（改鑄差益を活用）を図るため、貨幣改鑄や藩札発行が行われた。初の金銀貨改鑄が行われたのは1695年元禄の改鑄で、それを主導したのが勘定奉行荻原重秀と言われている。この荻原重秀の評価は大きく分かれるが、「貨幣は造るもの。たとえ瓦礫であっても行うべし」と主張し、江戸時代に早くも現代の管理通貨制度につながる名目貨幣の考え方に着眼していたとして、評価する意見もみられる（村井淳志著『勘定奉行荻原重秀の生涯』参照）。貨幣改鑄は、貨幣流通量の増加と経済の活性化、幕府財政の一時的な補填には効果を発揮したが、度重なる貨幣改鑄により、幕末には慢性的なインフレに陥り、貨幣制度は混迷を深めることとなった。

世界の通貨制度は、ゴールドラッシュに沸いた19世紀が終わり、20世紀に入ると経済規模の拡大に金の生産が追いつかなくなり、金本位制から政府や通貨当局の信用を背景とした管理通貨制度へ移行した。江戸時代の貨幣改鑄や藩札発行も、国内の金銀生産が枯渇する中、経済規模拡大に対する貨幣不足に対応したものである。その際、幕府・藩の信用が貨幣改鑄や藩札発行の成否を大きく左右したと言われる。ただし、一旦、貨幣改鑄など貨幣量増大の方向に大きく舵を切ると政策転換（出口）が難しく、結局、経済規模とマネーの量のバランスが崩れ、政府・通貨当局の信用維持が困難となる中、深刻なインフレを招いてしまったケースは多い。

現代に目を転じると、1990年代半ばには主要先進国でほぼ金融の自由化が完成し、マネーが瞬時に国境を越えて地球を駆け巡る時代を迎えた。その頃から金融経済は実物経済を上回る勢いで拡大し、バブルの発生、格差の拡大を助長しやすい状況を招くこととなった。今日も膨大な余剰マネーが存在し、バブルを引き起こしかねない投機的な動きが繰り返されている。瞬時にマネーが国境を越える今日、金融政策の有効性はかつてほど期待できない状況となっている。米国が実施しようとしているように、今後、日本でもいかに余剰マネーを吸収し、実物経済と金融経済のバランスを回復していくのか。その難しいかじ取りが試されようとしている。